

障害者のテレワーク支援に関する研究Ⅱ

-ASD者を中心とした職場開拓と職場定着の実践から-

縄岡 好晴 (明星大学人文学部 准教授)

山口 明乙香 (高松大学発達科学部 教授)

野崎 智仁 (国際医療福祉大学保健医療学部 講師)

はじめに

背景

日本職業リハビリテーション学会で実施した調査

テレワークの導入について

「発達障害の特性で困難が増す」48.8%と、
他の障害種別の中でも一番高い数字を示す結果。

テレワークにおける**職場開拓と職場定着を目的とした取り組み**は非常に大きな課題。

背景

令和3年度障害者政策総合研究事業によるヒアリング調査
テレワーク雇用を実施している企業の職場開拓の方法

- ①ハローワークの求人
- ②企業の採用サイトでの情報収集
- ③障害者の人材紹介を行っているベンダーとの連携 など

求人情報だけでなく

- 就労支援従事者が企業情報を丁寧に収集する重要性
 - 企業の採用方針や計画は定期的に見直し、情報交換を行っていく必要性
- 特に自閉スペクトラム症（以下ASD者）を中心とする発達障害者に対しては、個々の障害特性を丁寧に共有していく必要がある。

目的

本研究では、**障害種別の中で最も高かったASD者に対するテレワーク上の課題とその支援策**について触れ、**ASDを中心とした発達障害者のテレワーク支援の方略**を検討するための基礎資料となることを目的とした。

方法

対象

東京都・神奈川県内で就労支援に従事する就労移行支援事業所のスタッフ4名とした。また、ASD者のテレワークの就労経験のあるスタッフを選抜しヒアリング調査を実施した。

研究対象者の概要は表1に示す。

表 1 研究対象者の概要

	性別	年齢	支援経験	所属施設	有する資格
A	男性	29	4年	就労移行	社会福祉士
B	男性	34	12年	就労移行	社会福祉士
C	男性	29	5年	就労移行	精神保健福祉士
D	男性	45	15年	就労移行	サービス管理責任者

手続き

研究デザインは質的帰納的研究とし、半構造化面接を一人当たり1時間程度実施。調査期間は2022年2～3月。

インタビュー内容の概要は、ASD者へのテレワーク支援に関する経験とその内容、実践状況、課題、対応例、支援上の困難さについてヒアリングをおこなった。

結果

在宅勤務における労働環境

課題

仕事場所と家庭の場所を明確に分ける

仕事と家庭の場所と時間の切り分けが難しい

自宅では騒音や邪魔が入り、気が散って仕事に集中できなくなる

外部刺激による気が散らない作業場所を作ることが難しい

仕事のスケジュールを決めそれを守ることに困難さを抱えやすい

対応

→家の中のレイアウトについて相談

→動線の確認、アセスメントの実施

→スキヤタープロットによる評価

→スケジュールの指導

【技術・設備】

＜技術的支援の確認が必要となるため、視覚指示（手順書など）を活用する＞

＜インターネット接続の問題についてチェックシートを導入＞

＜ZOOMやTeamsなどの接続方法のシュミレーション＞

職務遂行上の課題

課題

コミュニケーションの方法や変化に課題

- ・ 発言のタイミングがわからない。
- ・ 質問していい時といけない時がわからない
- ・ 暗黙の了解の意図がわからない

注意の持続や集中の課題

- ・ 画面に映っているものや音が気になり話に集中できない

対応

→対応策として、進行役を設定し「挙手」機能など具体的なツールを活用。

→発言や質問があることをジャスチャーとして示す。

→背景などは社内で統一したものを実施。

→ぼかし機能など、視覚刺激に繋がらないものをアセスメントする。

職務遂行上の課題

課題

コミュニケーションの方法や変化に課題

- ・ 発言のタイミングがわからない。
- ・ 質問していい時といけない時がわからない
- ・ 暗黙の了解の意図がわからない

注意の持続や集中の課題

- ・ 画面に映っているものや音が気になり話に集中できない

対応

→対応策として、進行役を設定し「挙手」機能など具体的なツールを活用。

→発言や質問があることをジャスチャーとして示す。

→背景などは社内で統一したものを実施。

→ぼかし機能など、視覚刺激に繋がらないものをアセスメントする。

職務遂行上の課題

課題

作業の切り替えに課題

画面共有に気が散ってしまう、チャットなどの情報を見落としてしまう

対応

チェックシーとなどを活用

進行役が注意喚起を促すような発言をおこない、気持ちのリセットを図れ

注意の持続や集中の課題

タイマーや時計を自分の周辺に置き、リセットタイムをリマインド化する。

会議の議題、目標、期待することを事前に共有する。

会議後に議事録や録画を共有するなど、事後対応の方法も検討する。

孤立感の軽減

課題

上司や同僚とのコミュニケーションが取りにくい

対応

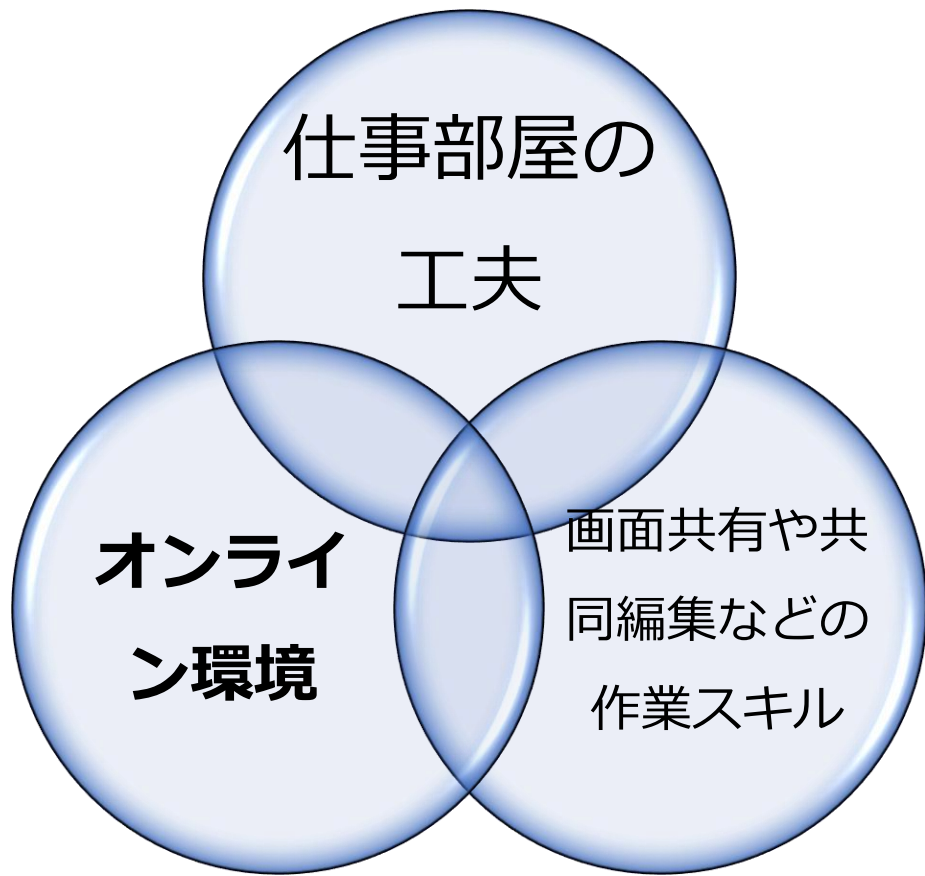
定期的なミーティングの機会を設定

メンタルヘルスの悪化等を確認するために、顔を会わせた定期的なミーティングを実施する

組織が積極的にネットワークを構築する仕組みを検討する

考察

発達障害者のテレワーク支援の方略として



ASD者の中には、障害特性上、視覚や音声の刺激が多く、複雑になったりすることで、認知的負荷が多くかかり、情報処理や適応性に時間を要してしまうケースなど



ASDを中心とする発達障害者のテレワーク就労の困難さや職業的課題が増してしまうことで、職場開拓と職場定着に結びつかない



効果的な実践モデル（ベストプラクティス）を集め、事例に応じた情報を多く集めることが大切である。
実践事例の少なさがASD者テレワークの課題となっている

参考文献

【参考文献】

- 1) 山口明日香 他『日本職業リハビリテーション学会員を対象としたコロナ禍の調査結果報告』, 「職業リハビリテーション35 (1)」, (2021), p.22-29
- 2) 山口明日香 他『国内の企業においてテレワークで働く障害者の 現状に関する研究』令和3年度厚生労働省科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)(総括)研究報告書「就労系障害福祉 サービス事業所におけるテレワークによる就労の推進のため の研究 (21GC1017)」